

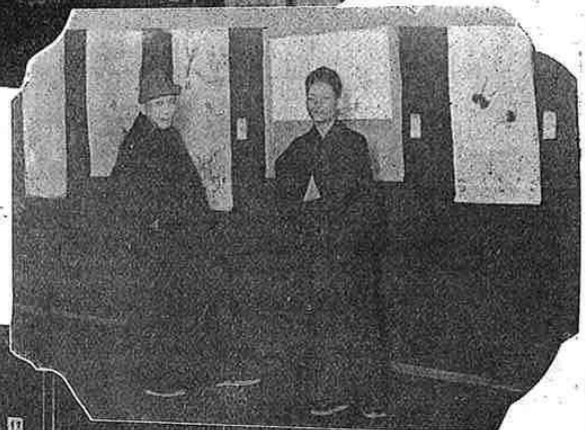
下 崩 會 展

川合玉堂門下の組織にある下崩會はその第拾回展を三月二日から六日まで三越ヤヤラリで開かれた。



林 間 社 展

二月一日から十五日まで上野美術館で開かれた寫眞は左から小池添康、加藤國堂、高須芝山、その他の諸氏



鈴が鳴る社展

二月二十日から二十五まで三越ヤヤラリに開いた。



茶 室 の 思 ひ 出 で

木 島 櫻 谷

景 年 翁 の 懷 古

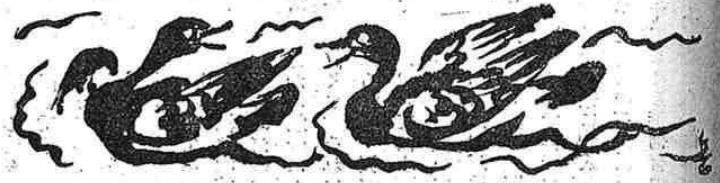
三年前の一月二日であつたか。

この日はいかにも正月らしい麗かな天氣であつた、新しい春を迎へた私は、わが齡の半白に近づいたことも忘れて、十年も若がへつたやうな心持で、あらたに恵まれる太陽の光に浴しながら、年賀の辭を述べべく師の宅を訪れたのであつた。

合しも二三の先客が歸つたあとで、私は直ぐに靜な茶室に案内せられた。

此茶室は師翁のお好みで作られたから、廣い屋敷の中で最もお氣に入つた部屋であつた、寒い日などは、大抵ここに籠つて過されたさうである。それは暖い部屋でもあり且つ師翁が晩年には大さう抹茶を喜んで居られたから、閑かに茶味に浸ることが唯一の樂であつたらしい。

元來師翁はお若い時から六十あまりまでは、支那風味の方であつた。抹茶よりも煎茶を喜ばれて平生唐人幅などをかけ文人物を飾つて、支那鉢の盆栽などは殊にお好きであつたが、晩年からは趣味が一變して謠曲や抹茶の方にうつられたのである。度その頃に偶然手に入れられた自然木のコブが猿の木にかまつて居るやうな纏めて面白い木を茶室の床柱に用ひられた。大徳寺の松雲老師は「捉月」と命じて、その素撰な筆になつた二字額が壁にかけてあつた。



南簾にあたる春の陽光をあくまで障子にうけて庭前の疎梅が師翁の墨畫でも見るやうに心憎き筆力あざやかな疎影横斜の影をうつしておつた。

一盆の茶を喫し終つて、床頭の幅を見ると、その筆致、その墨色、枯淡にして蕭散な、さながら相阿彌の小品を見るやうな師翁の近業であつた。

折から釜の湯は次第に靜な音をたて、さらぬだに暖い部屋を一層のどかな氣分にした。耳を傾けて聞か、それは微風の松梢をわたる聲か、細波の渚をあらふ響か、さては小雨の窓をおとづれる音か、極めてかすかなものではあるが、耳朶にひびくと云ふよりも深く人間の心の奥底にしみこんで特殊な境地に人を誘ふのである。冥目してこの微妙な音楽に聞入る時、人間の榮辱も何かあらん世上の毀譽はた何ものぞ、紛々擾々たる浮生に於ける一切の煩累を忘れて、しばし無何有の郷に逍遙せしめるのである。

ふと心づくま白髯の師翁は端然と坐して居られる。師翁の語られる時は弟子謹んで聽き、弟子談ずる時は師翁も莞爾あつた。かゝる匆々のあわたししい世の中では畫家は全然無用視されて唯衰微と頹廢の中に無自覺の暗路をたどる外なかつた。僅に少数有爲の作家が困憊の中にも藝術の精神を續けて斯道の爲に一縷の命脈をつないでおつた。

一方政府の要路にたつ人達も多くは少時から漢學の畑に育つた人であり且つ幾度か劔戟の下をくゞつて生死の巻に出入した豪傑であつたから溫雅な圓山四條の寫生風や優麗な土佐風畫なごには共鳴することも少かつた。たゞ南畫の——しかも放縱な疎豪な一派の筆致に興味を持つたから従つて世間一般の趣味も翕然としてその方面に傾いたのである。夫故南畫以外の畫家は見るかきもない窮地に陥つたのであつた、かゝる時代にあつては誰も彼も勢ひ世の風潮に動かざるを得なかつたものが、流派の如何に拘らずいづれも南畫の題材や手法に做つて中途半端の間に彷徨して居つたやうであつた。

百年翁は當時の寫生畫家は違つて學殖もあり詩書も巧であつたから、その素養や趣味の上から従前の畫風より一轉して漸次南畫の領域に入られたのは、また當然のことであらう。先師が百年翁につかれたのも、その頃であつたらしい。従つて青年時代の作品は著しく南畫趣味を帯びて居るが、漸くにして自然に直面して茲に自己の畫境を拓くことに留意せられた。その一面には院體の花鳥に指を染められ或時は南畫の風

として、うなづかれた、時には夢のやうな過去の追憶となり時には絶間なく動ける現代畫壇の傾向に轉じ更に古名家の比較より現時作家の評騰にまで及んで話題はそれからそれへと清興の盡くるこゝを知らなかつた。

○ 先師は年少の頃梅川東居に學ばれた。しばらくして後鈴木



先師は年少の頃梅川東居に學ばれた。しばらくして後鈴木百年翁の門に入られた。百年翁は土御門家の儒臣鈴木圖書と云へる人の子であつて學問の素養もあり詩書をよくして畫技は常師としてはなかつたさうだが一時は小田海傳に法を問はれたこともあつたとか、聞いて居つたが、その人物畫などは晩年にいたるまで何處かに海傳の風が見へるやうである。壯年迄の畫風は當時の京都畫壇に可なりの勢力を張つて居つた四條派の影響をうけて所謂寫生畫の溫雅な風氣を帯びておつたが中年後は漸次南畫の趣致に轉じて來た。明治維新後は時代の激變と共に一般の思想もまた驚くばかり變つて來た。當路の人もひたすら泰西の文物を輸入することになりぬ熱中して藝術の一面は殆ど眼中に置かなかつた程で

逆を善ばれたこともあつたが、要は寫實を根底にして、しかもその實相に拘泥せず洗練された筆致と相俟つて全然自家の藥箱中のものでせられた。三十歳あまりから四十歳前後にかけて出來た景年花鳥畫譜は當時最も精力をこめられたものであるから、これを見ても當時に於ける先師の作風を知ることができやう。

先師は四十三歳の頃京都府書學校(今の美術學校の前身)の教諭になられたが二三年にして病氣の爲に職を辭されて専ら靜養につこめられた。私の入門した頃は幾年の宿痾も全く癒へて元氣旺盛な四十八歳の暮であつた。それよりまた幾年の後、堺町に住せられた頃は、その技いよ／＼圓熟老成の境に入られて帝室技藝員を拜命されたのが六十に近い時であつた。

五十あまりから六十あまりまでの約十餘年の間は先師の最高潮期であつたかと思ふ、曾ては宋元を學び明清に倣ひ本邦古名家の作品を涉獵して、その間に得られたものが更に寫實に努力せられた先師の自然觀照を基礎として先師獨自のものが堂々と築きあげられた。洗練された筆致は愈老蒼の氣を帯び來つて幾多雄偉なる代表的大作は多く此時代に出來たやうに思はれる。

晩年は先師の畫を望むものが其門に殺到した爲に悠々自ら

樂んで筆をとられることは或は出来なかつたかとお察しする。先師が明治初年頃の青年時代に嘗められた火の消へたやうな畫壇の寂しさとは、全然異つた意味の苦境に立たれたやうであつた。

或時は好きな茶室にこもつて心ゆくばかり茶味に浸る氣持で筆をとりたいと話されたこともあつた。或時は三阿彌の話や光悦の作品に興がられたこともあつたから、私は、ひそかにその晩年期の一轉化に先師掉尾の飛躍が見られることゝ思つて居たが、かりそめの病つので、意外に早く世をすてられたことは先師の爲にも藝園の爲にも遺憾なことであつた。

○ 師翁の談は尾々こして盡きない、更に一盤を喫して、

『現代の日本畫は從來に見ない新味はある、若い人達の苦心も大抵ではないが、兎角色彩の配合、調和の苦心、形體の整正と描寫の精緻さに重きをおきて、筆の面白味がない、線の變化がない、それより受ける作家の氣分——心のうごき——魂のあらわれが見へない。つまり東洋畫の本質として形似以上色彩以上の重要なものを逸して居るやうに思はれる今の畫は一見して温雅な色調やゆきどよい描寫といづれも一樣のやうに見へて畫の中に引込まれる力が足りない、凡てに於て器用すぎる、あまりに巧みすぎる。古の畫

年前後頃は、世間が世間であつたから、いくら勉強しても一向に認めて呉れない、大さつばな南畫のやうなものばかり迎へられて。北宗の寫實的なものはその作品の如何に拘らず一顧もして呉れなかつた、併し人間云ふものは抑へられると夫だけ跳あげる力が養はれるものである。一頓の畫を製作するにも、どれだけ渾身の力をそゝいだか、知れない、一作毎に身後に遺して愧ぢないものをもと覺悟をもつて居つた。その頃に較べると今の時代は藝術の高潮時代で、作家などは此上もない幸福なことであるが従つてそれだけ名を成すに都合もよいため、動もするに安流になれて死力をつくすほどの研究が續かないやうに思はれる、凡て人間は苦んで居る時の方が花である。』

懇々と慈父の子を諭すやうな態度で、さきに舌端に熱を帯びた語調も、此一段になつて極めて穏かに、温かに聞へた、師翁が青年の頃、藝術の暗黒時代に處して逆境の中に生活と闘ひつゝその研究に精進せられた勞苦は、萬重の波のやうに刻まれた深ひ皺と雪のやうな干葉の白髯に傳はれて非常に尊く見受けられた、私なきの安流になれて無自覺な不眞面目な生活を戒められたのであらう、この暖い部屋の中にあつても猶冷汗の腋下に流れるのを覺へた。

師翁の談漸く盡きんとして爐中の火氣もまた衰へた、鏘然

は不器用である。鈍であるが、作家その人がハッキリ出て居る。現代は研究がいよゝ精緻に慧敏になつて來るが作家の心の強く迫つて來るものがない。ツマリ一種の細工物に墮ちて居る様である、それでは從來の日本畫の足りないものを補ふて居るがその代りに重要な一特質をば逸して居ることになりはすまいか。その得るところより失ふところが大きいではないか。』

八十の老翁は神旺して眉昂り耳熱し白髯を撫して意氣壯者を凌ぐの概があつた。元來ボツリ／＼と話はあまり巧でなかつた師翁の辯舌も次第に高調し來つては、彼の談辯の雄者が獅子吼するに似て居つた。まことに現代畫壇の一弊所を道破して居るもので、私は襟を正して傾聴した。

師翁の辯論熱を帯び來る折から釜の湯もまた一しきりたぎつて來た。さきには細雨の窓をおとづれるやうな静さが今や沛然として驟雨の俄に到るが如く松籟のさゝやくに似たりしものも鐵騎の縦横して鎧馬の鏘々然たるやうに覺へた。師翁は稍あつて、また語をついで。

『自分の若い時代のことを思ふと、今日はあまり結構すぎる、畫家などは生活が氣樂すぎると、兎角骨身にしみ入るやうな勉強が出来ないかと思ふ今は展覽會なども澤山にあつて作品を發表することも自由であるが明治の初年から十

(昭和二年一月)

### 小島善太郎氏個展を見る

三月五日から、十三日まで新宿の紀伊國屋書店で、小島善太郎氏の洋畫個展が開かれた。會場は小さいが光線もよし、感じもよし、個展なきの試みには好個の會場だと思ふ。シットリした落ち着いた心地で繪を見ることが出來た。總體で廿二點の内『フーレンスの塔』『雪』なきが最も面白い出來だつた。一體に高雅な淡い調子ではあるが、内容に豊かな詩味の呷まれてゐるのを見る。

猶、レンブラントの模寫で『ヘンリック、ストフェルの肖像』が會場に在つて目立つた。

(K・I)